

## (王の舞と村々の神事)

### 王の舞という儀式的な舞

#### 概要

王の舞（文字通りに言うと「王の舞」）は、一般的に、長い鼻の仮面を着け、薙刀をふるう一人の男性が舞う儀式です。この伝統は、11世紀から14世紀にかけて、日本の昔の首都である奈良と京都から広まったと考えられています。日本海の港町と首都圏との活発な交易が、若狭にその風習をもたらした文化交流を促進したものと思われます。現在、この地域では17の「王の舞」が保存されており、春の祭りの際によく行われます。舞の形式や長さ、参加人数、衣装は場所によって異なります。

#### もっと詳しく知る

##### 千年前からの伝統

王の舞の起源と目的は時が経つにつれて失われましたが、伝統は奈良と京都の宗教的な場所で11世紀に始まった可能性があります。多くの王の舞の装束の赤色は邪気をはじくものであり、いくつかの神社のこの舞にまつわる伝説は、英雄が敵を倒すことを物語っており、このことは、この儀式が災難や厄除けのために舞われている可能性があることを示唆しています。

##### 舞楽、伎楽との関わり

王の舞は、宮廷や貴族のために伝統的に演じられていた古代の舞のひとつである「舞楽」に由来する可能性があります。舞楽は、貿易や文化交流の過程で6世紀にアジア大陸からもたらされ、8世紀頃に独特の日本的な芸術形式へ発展しました。王の舞と、散手や貴徳などの舞手が勝利を祝う軍の司令官を表していると考えられている古代の舞楽作品との間には類似点が見られます。王の舞はまた、舞楽の人気が高まるにつれて次第に姿を消したアジア大陸のさらに古いタイプの仮面舞踊である伎楽の影響を受けている可能性があります。一部の研究者は、鼻の長い面を着けた王の舞の舞手の姿は、似た面を着けて道を儀式的に浄化する役割を果たした演者が率いた、伎楽の公演の前に行われた行列に端を発していると示唆しています。

##### 私有農園の役割

王の舞の伝統は、恐らくこの地方と昔の都を結ぶ交易路を通じて伝わったものと思われます。王の舞の伝統は、遠い地方にいる公家や有力な神社仏閣によって維持された荘園（私有農地）の存在によって維持されました。このような荘園は京都と奈良の文化を若狭へ広めることに大きく貢献し、そして現存する王の舞のほとんどが、かつての荘園の土地にあった神社で行われています。

## 王の舞のバリエーション

若狭地方の神社に保存されている 17 の王の舞には、かなりのバリエーションがあります。2 分間しか続かないダンスもあれば、最長 1 時間続くダンスもあります。多くは一人の男性の踊り手によって演じられますが、中には複数の参加者が関わるものもあります。出演者は大人の場合もあれば、学齢期の少年の場合もあります。王の舞の儀式的な目的は厄除けと考えられていますが、神社によってはこの舞は豊作や魚介類の豊漁などの特定の御利益を祈願する時に神様へ奉納されます。この違いは、各地域の民俗と村人のニーズや生活様式を反映して、王の舞がどのように変化したかを示しています。

## 展示品

マネキンには、さまざまな衣装、仮面、鉾が展示されており、若狭でまだ実践されている 17 の王の舞の違いが示されています。マネキンの前にある舞の写真は、衣装の幅をより詳細に示しています。ビデオ録画がスクリーン上で再生されており、この儀式的な舞のゆっくりとした定型化された動きを示しています。ガラスケースの中にある、赤い羽織、孔雀の羽で作られた精巧な鳳凰の頭飾り、江戸時代（1603 年～1867 年）の鼻の長い仮面は全て、かつては彌美<sup>みみ</sup>神社の王の舞で使用されていました。